



## センドードつうしん

第4号 2021年9月

仙台・羅須地人協会

本協会の会報「センドードつうしん」も第4号を数えました。

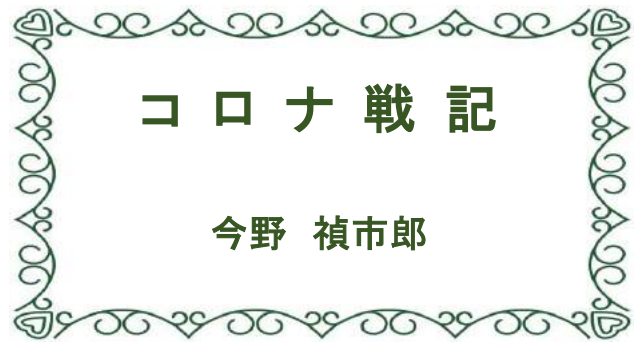
新型コロナウイルス感染症の蔓延からすでに1年半以上が経過しました。以来、「まん延防止等重点措置」や「緊急事態宣言」が繰り返し発令され、人々の日常生活もすっかり変わりました。「巣ごもり生活」の日々です。

そうしたなかで、経済が「K字回復」し始めたとも言われます。「K」の右上に伸びる線は強い企業や業界などがより強くなることを表し、右下に伸びる線は低迷から脱却でないままさらに落ちてゆく様子を表しています。しばしば言われる「2極化」とほぼ同様な意味です。

要するに、この状況に合致するような業種(例えば、インターネット関連業や一部製造業)などは業績を拡大させたものの、反対に飲食や観光などの対人サービス業は窮地に陥っている。

さて本号では、こうした状況に鑑み、「コロナ」をテーマとした会員からのエッセイを掲載しました。

ところでこれを執筆中に、首相実質退陣のニュースが飛び込んできました。さて、どうなることやら…。



## コロナ戦記

今野 禎市郎

はす向かいの税務署の屋上からサイレン音が鳴り響いた。あわてて立ち上がると祖父が「昼を知らせるサイレンだ。もう防空壕に入らなくていい」と笑って話した。石巻駅に近い店舗兼住宅は、母と私そこで産声を上げた弟の三人が身を寄せていた疎開先である。父は軍務で中国広東省の電信網構築に携わっていた。空襲警報のサイレンがうなると母が弟を抱いて、私は祖父と一緒に、庭の防空壕に入った。たまたに艦載機がやってきて駅や電話局を機銃掃射して帰ったが、から振りの警報が多かった。その空襲警報のサイレンが終戦を境に正午の時刻を知らせるだけになった。

78年前に終わった戦争の、我が家の「戦記」最終章はこんな書き出しから始まるのか。書くつもりはない。その前の章の記憶が多分にあい

まいだからである。

今は「コロナ戦記」。もちろん我が家のだが、この感染症次第ではあるが、気力が保てば書ける。「中学生の孫はこの夏休み中に1日3時間の特別授業が3回あった。コロナ半ドンだという。コロナ一斉休校分を取り戻すための、臨時の半日授業のことだ。半ドンの由来は、オランダ語の Zondag ゾンタック＝休日、あるいは軍が正午に放つ空砲音が由来、との二説がある。」という書き出しから始めたいとぼんやり考えていた。

そんなときに総理大臣が自民党総裁選に出ないとのニュースが突然流れた。その理由が「総裁選とコロナ対策の両方では、膨大なエネルギーが必要である。コロナ対策に全力を注がないといけないので総裁選に出馬しない」というのだ。自民党総裁は辞めて総理大臣に専念することが現実でない以上、この言は成り立たない。トップリーダーが降伏の白旗を挙げたように見える。総裁選に出馬しても一切運動せず、コロナ対策に専念し、結果として敗北するなら筋が通り、男も立つのにと思う。

ほとんど不休不眠状態で活躍して頂いている医療関係者も多い。多くの方々のおかげでいつか出口にたどり着けるであろう。様々な「コロナ戦記」が詳細な記録や証言をもとに出てくるはずである。その中にこの総理退陣がどう書き込まれるのか。自民党の総裁選が総理大臣の退陣に追い込んだと記すのであろうか。そうでなく、のちの世に歴史探偵と自ら称した故半藤一利さんのような人が詳しく解明するのか。



# コロナ禍

河合 秀次

今回のテーマにつき、現時点で感じているままと記載してみたい。

## (1) 政争の具になり過ぎ／し過ぎ

自然災害以上のこのコロナ禍では、どの政党が政権をとっても同じ、と私は常々感じている。世界的、国民的パンデミックに対し、与党も野党もナシ。米国では、国を挙げて何かと戦う場合に、2大政党が与野党の壁を越えて、一致団結して戦うの何度も見ているが、ある意味で、あの感覚（発想？）を日本（人）も真似出来ないだろうか？

## (2) 専門家の意見にもっと素直に耳を傾けなければ

折角良い提案や進言が出てきても、政治決着というか、いざ開いてみると、かなりトーンダウンしてしまうのを今回何度か見てきた。又、専門家／学者達が為政者に不満をもらすのも何回か～！ 政治的背景や出来ればコスト削減を、との観点がもしあったとしたら如何なものか？ 今の事態では、例えば「飲食業だけが何故いじめられるのだろうか？」という発言が飲食店経営者の口からよく聞かれる。その気持ちもよく分かるし、ごもつともである。要は休業補償を手厚くすれば済むだけの話で、何故ゆえに実現しないのだろうか？ 間接的表現かも知れぬが、「巧詐は拙誠に如かず」であろう。

## (3) オリンピックとの関連

昨年（2020）コロナ禍の為に東京オリンピッ

クは中止になった。今年は、止む無く強行された感じである。いろいろスポンサー関連、チケット払い戻し等々、煩わしい金銭的、かつ財政的諸問題があるのは分かる。

ただ、現実には丁度、オリンピックの時期と感染急拡大とがピタリ一致している訳で、オリンピックがコロナ感染に悪影響を及ぼした事は誰にでも容易に推察できる。主催者側の「こんな時こそ、スポーツの力で皆が明るくなり、若い人達に夢と勇気を与える事が重要！」との発言を何度も聞いたが、私個人は「チョットそれは違う！場違いだ。」と思えてならない。この発想こそが正に昨今のコロナ急拡大の原点と思えてならない。

勿論、オリンピックは否定しないし、画面で楽しませてもらった一人だ。為政者の言い分は「沢山メダルを取ったから、やはりオリンピックは開催してよかった」という発想かと思うがこれも違う！ こんなにも感染者が急拡大して、結局為政者も困り果てているではいか？ 僕がもし決定権の有る立場だったら、もっともっと早い時点で「中止」か「1年再延期」を決めていただろう。皆さんは如何でしょうか？

## コロナ禍 II

若生 和子

7月23日から、2020夏季オリンピックが開催されました。開会式は夜の8時。お昼寝をして終了の12時近くまでテレビを見ておりました。テレビの前に自分の敷席をつくり、無観客なことは寂しいのですが、それはコロナ禍の

なかどうしようもありません。

どの競技も選手一人一人の顔は真剣そのもの、勝っては勿論堂々と、負けても堂々と胸を張ったその姿には感動します。

ボクシングのリングの上では、判定がコールされると直前まで激しく殴り合っていた二人とは思えない、勝った入江聖奈選手(20歳)と負けたフィリピンの選手が抱き合って健闘をたたえ合う、その笑顔も美しい光景でした。勝者と敗者が抱き合う光景はどの競技でも見られるものの、五輪観戦ではスポーツマンシップの美しさがとくに際立ちます。メダルの色、勝敗に関係なく皆んな金色に輝いて見えます。

パラリンピックの開会式は8月24日の夜8時頃、まるで銀河鉄道に乗っているような場面でワクワク感に包まれました。

競技に到っては、身体に障害のあること等忘れさせる運動能力で、唯ただどれだけの努力をなされたのか、想像だにできません。

車いすラクロス・バスケットボール・競泳・マラソン・陸上等々と選手の人たちは夢を追いかけて前向きで、何と明るい表情でしょう。笑顔の素敵な方々です。

本当に心から元気をもらいました。「ありがとう、ありがとう」とテレビに向かい叫ぶほどでした。

宮沢賢治が、このコロナ禍の無観客での、2020オリンピック・パラリンピックを見たら、どのような感想を語られたのでしょうか。また、どんな詩や童話、小説が生まれたのでしょうか。

私は自分なりに、宮沢賢治の世界のまことの幸福、「ほんとうの幸い」を求めた精神が一杯に詰まったオリンピック、パラリンピック、それこそが世界の祭典ではないかと思い、そして宮沢賢治を慕いました。

オリンピック・パラリンピックを見ていましたら、宮沢賢治の詩や童話が次々とうかんできたのでした……。

## 思い出 賢治と従兄

内ヶ崎 健介

この2月、一つ年上の従兄を亡くした。経験しなかった空白感が続いている。これが喪失感というものか。去年11月彼は急に入院した。我家から台原の森に病院の窓が遠く見える。コロナ禍でなければ…あの病室に行って毎日でも語り合えたはずだった。一度も会えなかった。

幼い時から互いに「ちゃん」付けで呼び合い兄弟のように遊び育った。中学の時から星空を見始めた。高校時代は六畳間で机を並べて勉強し寝起きた。大学も専門も別になったが、なぜか共に高校教員になっていた。40歳後半に偶然同じ高校勤務となり職場・学校生活を共にした。想えば従兄とは宮沢賢治の世界でも繋がりがあった。

### 星めぐりの歌

高校時代二人で西公園の天文台に通って星を観た。従兄は当時新設のプラネタリウムの星空案内をしていた。まだ賢治は童話の範囲の時だったが、後に「星めぐりのうた」は「歌うプラネタリウム」だと二人で話し合ったことを思い出す。…コロナ禍なのに五輪は強行された…閉会式の終幕に「星めぐり」が歌われた

### 賢治祭

大学生活も終る頃、従兄を賢治祭に誘った。駅で落ち合って花巻が初めての彼とイギリス海

岸など賢治の現地を歩き巡った。夜は地元の子ども達と野良着の婦人の合唱、野外劇そして獅子踊り…小雨の中、かがり火からはじけた火花が今も眼底に残っている。その後全国から集まった研究者の語る会に参加した。賢治の広さ深さを二人で共有する夜となった。56年前のこと。

その頃「宮澤賢治の彼方へ」(天沢退二郎)が出版され従兄も読んでいた。序文に「…ぼくは作品の彼方へ行きたい。だれも行ったことのない宮沢賢治の作品の彼方をみるのだ…」とある。天沢著を読みながら春と修羅「小岩井農場」がどうして長いのか、わかりかけた頃だったと思う。

### 光でできたパイプオルガンを

従兄とは職場まで一緒になった。その学校では生徒出入りに「今週のことば」という掲示板があって教員がローテーションでお勧めの言葉を書いていた。わたしの当番となって以下を引用した。従兄も見たはずだった。

もしも楽器がなかったら

いいかおまえはおれの弟子なのだ

ちからのかぎり

空いっぱい

光でできたパイプオルガンを弾くがいい

春と修羅「告別」より



## 自宅療養で 死亡者がでるといことは？

芳川 良一

日々TV や新聞で医療崩壊の危機が報じられています。だれの目にもはや崩壊の危機ではなく、既に崩壊してしまっていることがあきらかです。

コロナ感染者病床が逼迫していると言いながら、空きはゼロではなくわずかながら残してある。なんともみみっちいやり方ではないか。どうしてそんなことをするんだらう。体面を繕うより一人でも多くの命をすくうべきではないのか。かたや自宅療養、受入れ先調整中がいつこうに減らずに、あげくに死亡者まで出ている。医療を必要とする方々が放置され、死に至ったということである。自宅療養を強いるということは医療放棄以外の何物でもない。ひょっとしてこの事態は憲法違反かもしれません。生存権に直結する問題だからです。

わたくしは医療についてなんら知識はありません。医療行政についてもわかりです。わたくしはこの事態を“もしわたくしが罹患したら”という受け身の立場での見方しかできません。ただ素人目に観て納得がいけないことが何点かあります。

日本の医療は2割が公的で、残り8割は民間が担っているという。民間医療機関に患者受け入れを強要することはできない。それはその通りです。この割合が適切なのかどうかはわからない。ただもっと公的医療の割合が増えればこ

ういう惨事は免れるのではなかろうか。2割にとどまっている実態はやはり新自由主義の弊害とみるべきであろう。公的医療を縮小し、民間任せ。さらにこうしたときにこそ機能すべき保健所の数がここ30年で半減しているとか。もはや医師会や医療機関は政府とのなれあいや妥協を演じることはせず、ここでいったんパンク状態を世間に示すべきではないか。

医療機関も変だ。コロナ感染者受入れの補助金を受け取りながら、受け入れ拒否の事実があると新聞に載っていた。これが事実ならなんともけしからん話である。公的資金の詐取である。

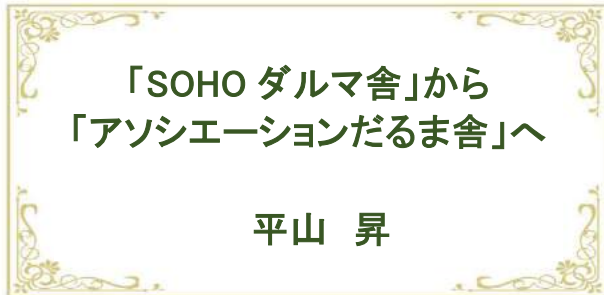
民間医療を担っている医師たちはどうなんだろう。ひとの命を救うのが医師の使命とするなら、自らの病院の事情（経営）を盾に涼しい顔をしていないだろうか。医師はその重大な使命に応じたかたちで社会的に高い地位を与えられ、さらに高い報酬も得られているのではなかろうか。ならば、ここでやはり行政や医師会の縛りに安住するのではなく、使命を多少なりとも果たしてやろうとする考えはでてこないのだろうか。

コロナ感染者治療に携わっている医師や医療従事者は、日々たいへんな思いをされていると聞いている。勿論そうした方々の努力と苦勞への感謝の気持ちは持っているつもりです。しかしながら、疑念はなかなか消すことができない。

新型コロナウイルス発生はその原因が、新自由主義経済、グローバル経済にあると言われていきます。発生源といわれる中国も大きな流れの中では新自由主義経済ということになるのでしょうか。感染流行は、一方でウイルスにより直接人類の生存を脅かし、かたわら新自由主義の医療切り捨ての結末である医療体制の脆弱さを露呈させたと言えます。ウイルスによって経済・政治の

体制見直しが迫られているのです。

みなさん、どうぞ感染防御に最大の注意を。国は命を守ってはくれませんので、自分で守るしかありません。くれぐれもご注意ください。



コロナは禍ではあるけれど、自分の都合優先でコロナを甘く見た安倍は逃げ出し、菅は無能をさらけ出し、先日の横浜市長選挙で自民党はコロナに負けたのを見るにつけ、コロナ危機を味方につけてこそ道は開けると思うところ、チャンスは今しかないと思う晩夏の日々です。

あらゆるところで底の抜けた日本、日々老いのすすむ中で果たして残りの人生で何が出来るのか、「時代へのカウンター」をミッションにした「ダルマ舎叢書」全5巻を出した後さてどうするかと考えて、この夏に私の個人事業の「SOHO ダルマ舎」をワーカーズコレクティブ化しようと数名の友人に声をかけて、「アソシエーションだるま舎」を現在準備中、9月に立ち上げる予定で、その「設立目的」は以下の通りとした。

(1)出版を通じて社会的協同組合、一般協同組合、アソシエーションの実現を目指す。

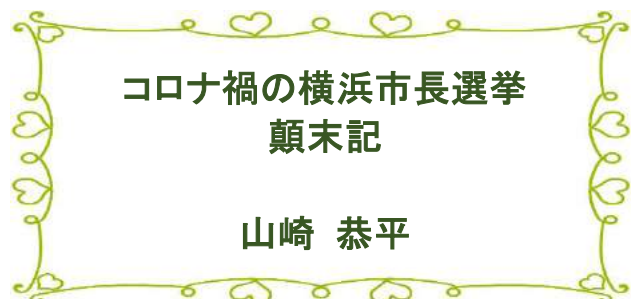
(2)同様にアソシエーションの創設をめざす人々に役立つ出版、研究、啓蒙活動を行う。

(3)同様の活動をすすめる個人、団体との連携、プラットフォームの形成をすすめる。

(4)それらを通じて、アソシエーション、コモン、協同組合地域社会の実現をめざす。

要は、アソシエーションづくりのためのアソシエーションを立ち上げるわけで、社会評論社の松田社長も組合員も「アソシエーションだるま舎」のメンバーとなってくれて、その事務所は本郷2丁目の社会評論社内に置けることになった。出版不況のみならずそこにコロナ不況も重なって、昨年来社員1名になった社会評論社は人も資金も苦しく、大内先生の「晩期3部作」づくりも滞ってしまったわけだが、それらのサポートも含めての起死回生のアソシエーションの立ち上げのつもりであり、この秋に本を3冊出版し、総選挙の最中に出版記念シンポジウムをやり、といったことをやる。

生協や農協といった既存の協同組合に代わる新しい協同組合を、私たちは「アソシエーション」とするわけだが、このモチーフには柄谷行人『ニュー・アソシエニスト宣言』（作品社、2021）がある。そこで「アソシエーションだるま舎」は、代表はくじ引きで選ぶことにし、メンバーが定数を越えた場合は課題やミッションに応じてこれを分割し、併せて別途それらの連携のためのプラットフォームを共有することとして、その名称は、プラットフォーム「NAM プルードンのアトリエ」とするところ、「仙台・羅須地人協会」の参加を期待したい。



3年前に仙台市から十数年ぶりに横浜市に戻り、この8月市長選挙を経験した。年初頃の大きな争点は統合型リゾート施設 IR 誘致の是非

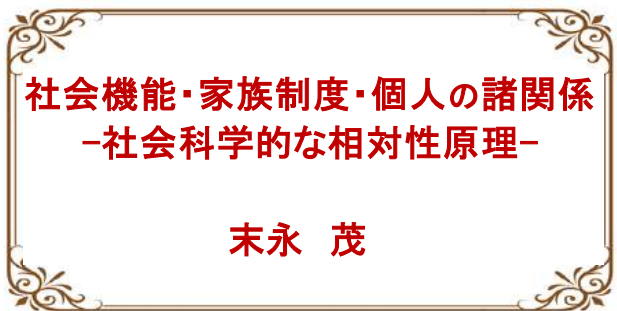
で、反対署名を集めた市民団体の活動が話題となっていた。しかし、選挙運動期間が近付くにつれて横浜市を中心に神奈川県のコロナ感染者が急増し、日に 2,000 人を超えて東京都に迫るようになった。そんな中で現職を含め過去最多の 8 人も立候補し、投票者数が拮抗すれば、トップ候補者の得票数が法定得票数 (= 有効投票総数の 4 分の 1) に満たず、再選挙もありうると見られていた。

8 人は与党系の現職の他知事や国会議員経験者もいる中で、現総理のおひざ元で全面支援を受けた閣僚経験者が最有力と目されていた。しかし、コロナ感染者が急拡大して政府の対策に不信が高まる中で野党が推すコロナ専門家への支持が日を追って増大し、投票日 22 日には締め切り午後 8 時に早くも当確の報道が出る勢いとなった。逆転の契機は、感染者拡大で病床がひっ迫し感染者の多くは自宅療養を強いられるようになったからだと感じた。

この感染症はそもそも自宅療養が無理であるし、家族への感染や集合住宅では同居者への感染リスクが大きい。だから、感染した場合に病院に入院が出来なくても、多くの住民はホテル等での宿泊療養を希望する。しかし、政府は国民の安全安心を図ると言いながら病床確保等医療体制の拡充を怠り、挙句の果に感染者に自宅療養を請うに至って、市民の懸念は怒りに転じた。そして、総理支援の与党候補支持者を含む多くの市民が新人の野党が推すコロナ専門家に託す選択を行った。投票率は前回よりも 11 ポイントも上がって 49% となり、18 選挙区のうち 17 選挙区で後者が前者の得票を上回る圧勝となった。

横浜市長選挙は地方選挙であるが、選挙の最大の争点は国民の命に係わるコロナ対策で、国

政選挙の様相を呈していた。そのため、近く予定される衆議院議員選挙への少なからぬ影響が予想され、与野党の対応が注目されている。この 10 年くらいのうちに、日本は東日本大震災や今次のコロナ禍の大きな国難に見舞われた。国難を乗り越えるには国政の危機管理能力やリーダーシップが何よりも肝要であろうが、最近の日本ではいずれも弱体でかつ頼りなくなり事態が悪化していると見受けられる。非常時における本来の国政を取り戻す上で、今回のコロナ禍における横浜市長選挙は示唆に富んでいたと思う。



デューリングやマッハ、そしてケインズらの理学的素養を身に着けたイデオログは究極の形態を天体運動学理に求めているため、人間社会というチツポケな存在に対しては極めて原理主義的である。その一つの理念形態にコモنزや共同性という概念がある。この志向は共感を得やすいが、「言うは易く、行うは難し」の典型のようなものである。類的存在における個の存在を強調すれば、個々人は競争=無制限の個人間の権利主張に晒され分解する。社会統治の難しさがそこにはあるが、対極において共同性を強調するあまり集団主義に傾き、行きつく先は粛清の嵐ということにもなりかねない。戦争で多くの人命が失われれば、家族制度も社会構成も必然的に変質せざるを得ないが、幸い我が国の現状はまだそこまでは逼迫していない。

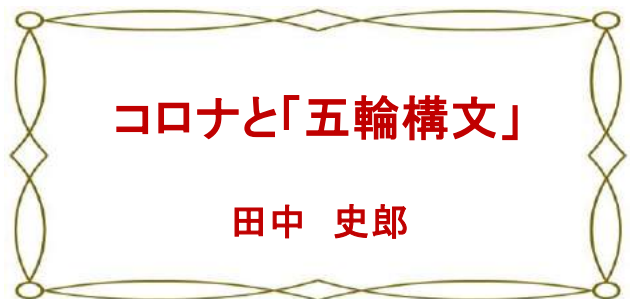
明治以降の我が国は封建遺制と近代化という

特殊西欧主義の導入との葛藤だった。今でも読み継がれている優れた小説のテーマは、共同体的に包摂されていた封建（農村）社会的イデオロギーといわゆる近代（都市）的自我との壮絶な戦いであった。原稿用紙に血反吐を吐きながら書き連ねた戦前の作家たちは文字通り身を削って執筆活動をしていたため、短命な文人が多い。人の一生は一回限りであり、物理的な時間軸の価値形態ではない。享年 80 でも 20 でも「一生という同じ長さ」の時間軸であるから、彼らはそれで満足だったのだろう。という感慨も脳裏をよぎる。作家たちは作品を通じて悠久という時間軸を獲得したのかもしれない。だが近年、生涯現役なる社会政策が広まり、長ければ長い程人間的価値が高いかのような風潮が醸し出され、社会福祉政策の充実の名において一部特権的な社会層だけが優遇されている。そして生涯報われることのない層と、世代としての若年層の相対的冷遇が進んでいる。生命現象にあえて逆らう政策は、社会の至る所で齟齬をきたしているように見える。

こうした現象は資本主義システムに固有の現象というより、決して容認してはならない社会的あるいは非道徳的観念が齎す社会精神の在り方の問題なのである。これを資本主義の根本的矛盾と規定すれば、人々は歴史経験的に「お手上げ」を社会的に共有してしまう。今更、大日本帝國的体制下の家父長的な家族制度に逆戻りもできないが、旧制度の全てを否定できるわけでもない。つまり現状の家族の在り方については、成年後見制度なる曖昧な制度導入よりも、家督相続や生前引退の制度を復権ないし再評価すべきではないだろうか。高齢者の自動車運転免許返還ですら、家族の説得はかなり難しいと言われている。この事例をもってしても生

涯現役なる観念は制度的に制限を加えるべきであり、様々な社会改革を立体的かつ連続的に積み重ねて行かなければならないと思う。個人的自由や共同体機能が適度にバランスされ、滞りなく世代と特権層が交代される社会がベストである。

如何なる社会においても、悩みとか不満のない人間など存在しない。しかしながらデモや集会に足を運ばずとも、自らの意思表示出来る社会であればと願うばかりであるが、つぶやきとか愚痴とも違って欲しい。



ネットでは「五輪構文」なるものが流布している。新型コロナ感染が拡大傾向にあり、深刻な事態になることが明らかであるにもかかわらず、政権はオリンピックを強行した。予測通り、事態は最悪になっていった。そして、オリンピックが終わると、今度は「帰省」を控えるように恫喝ともとれる発言が続いた。

オリンピックの開催強行に関して、菅総理は実に訳の分からないことを言い続けてきたが、それを捩（もじ）った表現が「五輪構文」だ。総理発言の「オリンピック」を「帰省」に替えたものである。前総理の文言を捩ったものもあるが、詠み人知らずの全 17 作品全てを列挙しておこう。

①「中止の考えはない。強い警戒感を持って帰省に臨む」、②「バブル方式で帰省する。感染拡大の恐れはないと認識している」、③「帰省を



中止することは一番簡単なこと、楽なことだ。帰省に挑戦するのが国民の役割だ」、④「安心安全な帰省に向けて全力で取り組む」、⑤「コロナに打ち勝った証として帰省する」、⑥「(帰省は)今更やめられないという結論になった」、⑦「『帰省するな』ではなく、『どうやったら帰省できるか』を皆さんで考えて、どうにかできるようにしてほしいと思います」、⑧「もしこの状況で帰省がなくなってしまったら、大げさに言ったら死ぬかもしれない。それくらい喪失感が大きい。それだけ命かけて帰省する為に僕だけじゃなく帰省を目指す国民はやってきている」、⑨「家族に感動を与えたい。帰省はコロナ禍収束の希望の光」、⑩「我々は帰省の力を信じて今までやってきた。別の地平から見てきた言葉をそのまま言ってもなかなか通じづらいのではないか」、⑪「(帰省中止要請は)自主的な研究の成果の発表ということだと思う。そういう形で受け止めさせていただく」、⑫「言葉が過ぎる。帰省中止を決める立場にない」、⑬「帰省が感染拡大につながったエビデンスはない。中止の選択肢はない」、⑭「(帰省について)政府は反発するだろうが、時間が経てば忘れるだろう」、⑮「帰省することで、緊急事態宣言下でも帰省できるということを世界に示したい」、⑯「帰省について限定的、統一的な定義は困難」、⑰「実家を訪問するという認識。帰省するという認識ではない」。

全 17 作品、いずれも天晴 (あっぱ) れなパロディだ。これをみると、総理の言葉が如何に無内容かが改めて浮き彫りになる。

このところの政権支持率は、ほとんどの世論調査で 3 割を下回っている。総理以下、一刻も早く辞めていただきたい。もはや感染拡大は、パロディで済まない事態に達しつつある。コロナは「付度」してくれない。

## 編集後記

「コロナ禍とスポーツ」が、穏やかなはずの日常に割り込んだ今年の夏、みなさんはいかがお過ごしでしたでしょうか？

「2020 東京オリンピック競技大会」に続いて、つい先日の 9 月 5 日「2020 東京パラリンピック競技大会」が終了しました。両大会とも、COVID-19 禍により一年延期されたものの、パンデミックそのものはむしろその脅威が増しているさなかに無理強い開催されました。

「競技」「スポーツ」「アスリート」「障がい者」という、一見したところ異議・異論をはさむ余地のない言葉がおもてに立つ一方で、世界の「平和」と未来における「多様性」「調和」の実現がことさらに強調された「祭典」に、違和感を覚えると同時に胡散臭さ・世知がましさを強く感じたのはわたしだけだったのでしょうか？感染学・免疫学などの基礎医学やいわゆるデータ・サイエンスなどの「科学」の知見に基づいた開催の可否判断が素通りされたことに、「利権や裏世界に通ずる政治の闇」を感じ取ったのはわたしだけではなかったと思います。開会式や閉会式はもちろん、テレビ観戦とは一切無縁の日常を送られた方も少なくなかったものと想像します。

オリンピック閉会式が、大竹しのぶが中心となった“星めぐりの歌”で締めくくられたことを知った時、ザラッとわが心中を野分の暴風が過りました。よりによって、なぜ大竹しのぶと宮沢賢治が、“そこに”登場させられてしまったのか、と。

\* \* \*

ところで、今夏多くの口の端に上ったもう一

つの「スポーツ」は、全国高等学校野球選手権大会でした。この、いわゆる夏の甲子園大会も、昨年は COVID-19 禍で中止されましたが、今年は、一般観客は入場不可、各代表校の生徒や保護者は当該試合に限り入場可、声を出しての応援は不可等、「感染防止対策」を施した上で開催されました。世界中から大人数の移動をとまなうオリンピック競技大会と比較すれば、国内だけの、しかも限られた人数の移動という点では、ウィルス感染の危険性は低いかもしれませんが、やはり「開催ありき」の心情が勝ったと言わざるを得ません。

案の定、大会期間中、選手のなかにも新規感染者が出ました。しかも当協会の地元(宮城県)代表校でも選手の一人の感染がわかり、2回戦の出場を辞退する結果となりました。初出場でありながら、初戦で全国屈指の強豪校を破った勢いがあっただけに、選手はもちろん誰もがただならぬ悔しい思いをいただいたことは想像に難くありません。

ただ、ここでは、代表校校長が辞退理由を「2回戦に出場すると、どの生徒が感染者なのか特定されて、生徒のプライバシーの保護につながらない」と語った点に注目したいと思います。一見、感染した選手を思い遣る教育者のことばのように思われます。しかし、はたして感染と

いう事実は、隠さなければならない『問題』なののでしょうか？むしろ誰にも感染する可能性があるという、ごく当たり前のことを思うと、感染した選手をあらゆる非難・誹謗・などの不条理・理不尽から、「断固守り抜く」ことを宣揚することこそが、2回戦を全うできたことも含めて、教育者のとるべき道だったように思われるのですが、みなさんは、どうお考えになるでしょうか？ (樹)

## Information

### 羅須(ラス)ゼミ

第17回 「ジャン・ジャック・ルソーの思想とわたしたちーその6」山形 欽一、10月2日(土)

第18回 「ジャン・ジャック・ルソーの思想とわたしたちーその7」山形 欽一、11月6日(土)

第19回 「現代の課題:基本テーマ策定のための論点整理」末永 茂、12月4日(土)

### 第6期 セミナー

第4回 「オルタナティブな協同組合としてのアソシエーションへ 1」平山 昇、9月18日(土)

第5回 「オルタナティブな協同組合としてのアソシエーションへ 2」平山 昇、10月16日(土)

センターつうしん 第4号 2021年9月

## 仙台・羅須地人協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町 2-5-12

一番町中央ビル 8階「シニアネット仙台」内

HP <http://rasuchijin.jpn.org/>

Tel 022-266-5650 FAX 022-266-5662

Mail [rasuchijin-office@rasuchijin.jpn.org](mailto:rasuchijin-office@rasuchijin.jpn.org)

